

現代中国人が抱く「日本イメージ」の構造及びその 規定要因：社会心理学的アプローチ

著者	江 暉
学位授与年月日	2016-09-01
URL	http://doi.org/10.15083/00075188

博士論文（要約）

現代中国人が抱く「日本イメージ」の構造
及びその規定要因

—社会心理学的アプローチ—

江 暉

本研究は、日中関係および日本社会における対中世論の現状とその問題点を踏まえ、中国における対日世論に焦点を当て、中国の一般国民が認識している「日本」の全体像を体系的・学術的に提示することを目的としている。より具体的には、社会心理学において広義的に定義される「イメージ」の概念に基づき、中国人が抱く対日認識を「認知」と「評価」、「感情」、「行動意図」という4つの要素から構成される「日本イメージ」と再定義したうえで、その構造内部における各構成要素の関連性及びその形成過程において種々の規定要因が果たしている役割を実証的に明らかにすることを試みるものである。

上述した研究目的の実現に向けて、本稿は下記の通り、序章と終章のほか、三部構成(計6章)で論述を展開している。

「第I部 『日本イメージ』研究の現実的・学問的要請」は「第1章 日中関係史の文脈における日本認識」と「第2章 社会心理学の視点から見る『日本イメージ』」から構成されている。ここでは、本研究の問題意識及び研究の背景を明確にさせたいと、現実面と学問面という2つの側面から、現在如何なる「日本イメージ」研究が必要とされているかについて論述し、本研究のフレームワークを提示した。

第1章では、日中関係という文脈において、中国人の日本に対する認識が歴史的・社会的にどのように捉えられてきたのかを整理し、本研究の現実的必要性を提示した。まず近代以前の中国文献における「日本」に関する記述を概観することにより、中国人の抱く日本人観が航海・通信技術の発展という客観的な条件に制約されている一方で、各王朝の性質及び中国国内の社会情勢などという認識側の主観的な要素、さらには、日本の対中政策とも強い関連のある両国関係という人為的要素からも大きく影響をうけていた、という特徴の変遷を示した。次に、1972年の日中国交正常化後から現在に至るまでの日中関係の歩みを確認し、近年日中関係に現れた新たな動向——中国の社会的変革とともに浮上してきた「対日世論」の重視及び日中関係の厳しい局面を打開する手段として表明された「民間外交」——すなわち本研究の時代的背景を説明した。最後に、こういった背景のなかで行われた幾つかの世論調査の結果を取り上げ、その特徴及び社会的影響について述べた。

第2章では、関連分野で蓄積されてきた学術的諸理論・知見及びその限界を検討し、本研究の学問的位置付けを提示した。まず社会心理学における「イメージ」の概念とその構成要素に関する理論を確認し、そのうえで「認知」と「評価」、「感情」、「行動意図」という4つの要素から構成された、本研究における「日本イメージ」の定義を示した。次に、

関連する先行研究をレビューし、その成果と問題点を指摘し、本研究の枠組及び具体的な方法論、調査の実施方法、そして学術的視点から見る本研究の新規性を詳しく説明した。

「第Ⅱ部 『日本イメージ』の実態」は「第3章 『日本国イメージ』の構造」と「第4章 『日本人イメージ』の構造」から構成され、本研究で用いる「イメージ」の定義に基づき、日本「国」と日本「国民」のそれぞれに対する「イメージ」について実証調査データを用いて構造的に分析した。

第3章では、まず、中国人の「日本国」に対する「認知」、「評価」、「感情」、「関心度と行動意図」の4つの構成要素の実態を考察することにより、「日本国イメージ」の現状を提示した。その結果として、経済的優位性が認められている一方で、軍事的脅威性が警戒されている、すなわちポジティブな要素とネガティブな要素が同時に存在していることが明らかになった。また、「日本国イメージ」と、アメリカ、韓国、北朝鮮、インド、ロシア、フィリピン、ベトナムの7カ国に対する「イメージ」との比較を通して、中国人の諸外国認識における「日本国」の相対的位置付けが浮き彫りになった。さらに、上述した構成要素の相互関連性に関する考察に基づき、「日本国イメージ」の全体構造における相互影響について検討を加えることにより、低い水準にある対日本国「好感度」は、1つの構成要素として他の要素と緊密に関連しているものの、「関心度と行動意図」の形成においては限定的な役割しか果たしていないことが判明した。また、サンプルのデモグラフィック属性間の比較を行うことで、「日本国イメージ」に関する一般的認識、特に若年層が抱く対日「好感度」をめぐる観点である「若者親日論」や「若者反日論」などを検証し、新たな知見を提示した。

第4章では、日本人男性と日本人女性を区別し、それぞれに対する「認知」と「感情」、「行動意図」を分析した。その結果を比較することにより、「日本人男性イメージ」においてはポジティブな要素とネガティブな要素が共存しているのに対して、「日本人女性イメージ」にはポジティブな要素のみ含まれており、しかもこの特徴は各属性のサンプルに共通して現れていることが判明した。確かに両者に対する「認知」においてステレオタイプの一般的な認識が存在していることは否めないが、中国の一般国民が抱く日本人男性と日本人女性に対する「イメージ」において大きな差異があることがわかった。そして、「日本国イメージ」と同様に、「日本人イメージ」における構成要素間の関連性を考察した結果、「感情」要素は日本人に対する「行動意図」を形成する唯一の判断要因でないことが明らかになっ

た。また、一般人調査と学生調査の結果を比較してみると、学生サンプルの日本人、とくに日本人女性に対する「認知」が一般人調査の結果と比べて多元化していることも判明した。

「第Ⅲ部 『日本イメージ』の規定要因」は「第5章 内的心理要素の影響」と「第6章 外的情報源の影響」という2つの側面から、「日本イメージ」が形成されるプロセスにおいて影響を及ぼす幾つかの要因について、実証調査データに基づいた検証・検討を行った。

第5章では、先行研究の知見をふまえ、「生活満足度」と「国際志向」、「自国評価」、「愛国心」、「日中間の諸問題に関する認識」、「日中関係に関する認識」といった内的心理要素を取り上げ、それぞれ「日本イメージ」の形成に与える影響を考察した。第6章では、直接的な接触（4項目）と間接的な情報源（3カテゴリー計27項目）にわけ、中国人の日本に関する情報源の利用状況を把握したうえで、「日本イメージ」との実際の関連性を検証した。

結果として、まず全体として「日本イメージ」の形成において、内的心理要素が果たしている役割は外的情報源と比べて顕著であることがわかった。内的心理要素の中で、最も影響力が大きかったのは「日中関係に関する認識」という項目である。日中関係が良好であると認識する人はより好意的な「日本イメージ」を持っている傾向がみられた。同様にポジティブな役割を果たしているのは海外生活や国際交流への志向性の強さを表す項目「国際志向」である。その他の項目に関する考察結果では、一貫した方向性を見出せなかった。例えば、問題視されている「愛国心」に関しては、今回の調査を見る限りでは、一定程度の排外的な性格を帯びていることは否めないものの、ネガティブな「日本イメージ」の形成において顕著な役割を果たしているとは言えない。

一方、外的情報源に関する考察結果では、一貫した強力な影響力を持つ項目は確認されなかった。まず年齢と学歴によって若干差異が見られるものの、「中央テレビ局（CCTV）のニュース番組」、次いで「国産戦争ドラマ」、「国産戦争映画」、「ネットニュース」が主な情報源となっていることがわかった。諸情報源のうち、「日本イメージ」と概ねポジティブに結びついているのは「日本での滞在経験」や「日本語の学習経験」、及び「海外ドラマ」と「海外映画」といった項目である。ただし、これらの情報源の利用は利用者の能動性と緊密に関連しているため、必ずしもこれらの情報源が一方向的に「日本イメージ」を向上さ

せるとは結論できないことに注意が必要である。これに対して、これまで問題視されてきた「CCTVのニュース報道」や「学校教育」、「国産戦争ドラマ」、「国産戦争映画」、「国内のネットニュース」、「国内のSNS/BBS/ブログ」などが果たしている役割について、実際にネガティブな影響とポジティブな影響が並存していることが判明した。上述した内的心理要素による影響と比べ、これらの関連性はいずれも顕著とは言えないが、少なくともこれまで指摘されてきた個別の情報源によるネガティブな影響を過剰評価するのではなく、多角的に見る必要があることを、今回の調査結果は示唆していると考えられる。

最後に、終章では、本研究の考察結果のまとめを行ったうえで、社会心理学での外国イメージ研究分野における本研究の学術的貢献、及び日中関係という現実的な問題の解決、とりわけ「民間外交」の実施に向けて本研究で得られた知見が生かされる可能性、すなわち本研究の現実的意義を述べた。政府間の外交が機能しない場合に期待される「民間外交」は、実行者となる一般国民の両国関係に対する認識が大きく影響し、相手国を評価して行動する、というジレンマを抱えている。一方で、中国人の抱く「日本イメージ」の全体構造からみれば、中には不安定な対日感情に影響されにくい部分があることも示唆されており、これらの認識を把握・理解できれば、「民間外交」を実現させるカギになることを指摘した。また、本研究の理論及び調査実施、そして分析方法における問題点、考察結果の限界および残された課題を明らかにし、今後の研究の展望についても論じた。

本研究は以下の5つの特徴・意義があると考えられる。第一に、社会心理学における学術的定義に基づき、複数の要素から構成され、広義に位置づけられる「日本イメージ」を構造的に提示したことにより、「感情」要素を重視する従来の視点の限界を克服し、中国人が抱く「日本イメージ」の全体像を捉えた点である。第二に、「日本イメージ」を国と国民、さらに国民を男性と女性に区別して考察することで、これまでに一体化されてきた「日本イメージ」をより明瞭に整理したことである。第三に、「内的心理要素」と「外的情報源」という2つの側面から、「日本イメージ」の形成における規定要因を総合的・体系的に考察したことにより、各規定要因の影響の横断的比較を可能にした点である。第四に、独自に作成した質問票を用いた調査の実施により、これまで常識化・固定化した感のあった中国人の「日本イメージ」に関するいくつかの観点を検証することができた点である。第五に、一般人調査と学生調査の結果、加えて「日本イメージ」と諸外国「イメージ」に関する考察結果との比較を通して、中国人の日本認識をより立体的・客観的に捉えた点である。